

成福寺 聖徳太子像

本願寺派 鎌倉市小袋谷

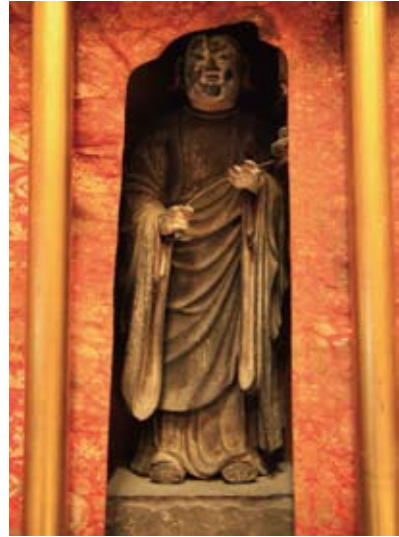
成福寺由緒

亀甲山法徳院と号す。成福寺の開基は、鎌倉幕府3代執権北条泰時の子“泰次”で、幼少より仏教を学び得度して沙門院泰次入道と号し、天台宗の僧として裏山の「亀の窟」で修行していた。『一切経』校合の際に浄土真宗の教えを説いていた親鸞聖人に出会い、教えを受け弟子となり「成仏」の名を受け、貞永元年(1232)寺を浄土真宗に改宗した。その年の9月に、修行の場であった「亀の窟」の勝地に一字を建立し、成福寺と号して、親鸞から贈られた「聖徳太子木像」(鎌倉七太子のひとつ)を安置した。

正福寺所蔵の『略縁起』に記載の「聖徳太子略縁起」のなかには、宗匠として『一切経』校合に招かれた親鸞聖人のために、常盤の地に禅房を建立し、迎えたとある。そこで聖人は説法の座を開き、群朋を教化し、泰次はその禅房に出向き、聖人に拝謁したと記述されている。

成福寺はその後、鎌倉幕府が滅亡し、ときの4代住職成円(北条高時の弟)は追放された。以後室町時代までの70余年無住であった。

また、戦国時代終わりに、小田原北条の意向を誤解した奉行衆に迫害され焼き討ちに遭い、時の9代住職宗全は伊豆にのがれ、その地に成福寺を建て、慶長17年(1612)鎌倉に戻るまで暮らした。今でも伊豆の成福寺は、浄土真宗大谷派の末寺として現存する。また、ここから別れた宝徳寺には、成福寺に宛て速やかに鎌倉に帰るように伝えた小田原北条氏の朱印状が現存する。



成福寺 聖徳太子像

成福寺のある場所は鎌倉(市街地)の目前であり、巨福呂坂のトンネル抜けて鎌倉に入る。寺の脇には「戸塚道」(古道)が通っている。この古道は鎌倉に入る要衝であり、戸塚区や栄区に通じ、道沿いに親鸞聖人の旧跡寺院が点在していることから、聖人がこの古道を通り鎌倉に入っていたとも考えられる。